

『サロベツのタンチョウ・ガンカモ』報告会

令和6年2月4日（日）14：00-16：30

豊富町定住支援センターふらっときた（会場+オンライン）

挨拶 長谷部真（サロベツ・エコ・ネットワーク）

第1部 サロベツのタンチョウ

14:05-14:30 「サロベツのタンチョウの渡り」

長谷部 真 / NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク

14:30-15:00 「標識調査によるタンチョウの渡り個体」

百瀬 邦和 / NPO 法人タンチョウ保護研究グループ

15:00-15:10 休憩

第2部 ガンカモ類

15:10-16:30 「サロベツのガンカモ類とペンケ沼の保全」

長谷部 真、嘉藤 慎、小松 祐太、望月 寧那
/ NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク

主催：NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク

協力：NPO 法人タンチョウ保護研究グループ

日本野鳥の会道北支部

助成：サントリー世界愛鳥基金、パタゴニア環境助成金、
バードライフインターナショナル東京(PCPD)

講演要旨

サロベツの標識個体の渡り

NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク長谷部真

私たちは2021年-2022年に経団連自然保護基金、2023年はサントリー世界愛鳥基金の助成を受け環境省の保護増殖事業の一環として、豊富町で捕獲によるタンチョウの渡り調査を実施してきました。無双網を用いて2021年は4羽に足環を装着、うち1羽に発信機を装着し、2022年は5羽に足環を装着、うち3羽に発信機を装着し、2023年は2羽に足環と発信機を装着しました。標識個体の越冬期の行方は道東地方の野鳥関係者の協力により明らかになっています。

足環番号471は2023年10月に豊富町で捕獲しました。発信機と足環を装着しましたが、捕獲の翌日に個体を確認した後は電波が受信されず、その後確認されていません。

足環番号472は2023年11月に豊富町で捕獲しました。11月19日に天塩町に移動、11月25日に名寄市を經由して11月26日に下川町まで渡ったところで発信機が脱落しました。その後、2024年1月に幕別町で確認されています。

足環番号429は2022年10月に豊富町で発信機を装着し11月17日まで豊富町に滞在し、2023年1月に興部町に渡りました。その後、1月27日に音更町に渡り、1月29日から3月14日まで浦幌町に滞在し、新得町、足寄町、上川町、中川町を経て、3月20日にサロベツに戻ってきました。2023年に繁殖は行わず、11月4日に浜頓別町に移動、11月25日に興部町に移動し、12月21日に置戸町を經由して12月21日に鶴居村に到着し越冬中です。

足環番号426は2021年10月に豊富町で捕獲し発信機を装着しました。11月30日に豊富町を出発した後、12月24日まで浜頓別町に滞在し、鶴居村に12月26日到着し2022年3月18日まで越冬しました。3月24日に豊富町に到着し、8月22日に発信機が脱落しました。その後、12月21日には鶴居村で確認されました。2023年は3月26日にサロベツに到着し、12月28日に鶴居村で確認されました。

足環番号448は2022年10月に豊富町で捕獲され、12月20日に幕別町で確認されました。2023年は7月にサロベツで確認され、12月14日に幕別町で再度確認されました。

足環番号449は2022年10月に捕獲され、2023年1月7日に鶴居村で確認されました。5月25日には初山別村、6月6日には稚内市で確認され、2024年1月4日に鶴居村で再度確認されました。

足環番号450は2022年11月に豊富町で捕獲され、12月12日には鶴居村で確認されました。2023年は3月26日にサロベツで確認され、2024年1月に鶴居村で確認されました。

宗谷地域周辺は道東に次ぐタンチョウの繁殖地として重要です。2023年11月にジャパン・バードフェスティバルで宗谷地方のタンチョウについて普及啓発しました。今後もサロベツのタンチョウの渡り経路や詳しい繁殖状況を明らかにするために活動を続けていきます。

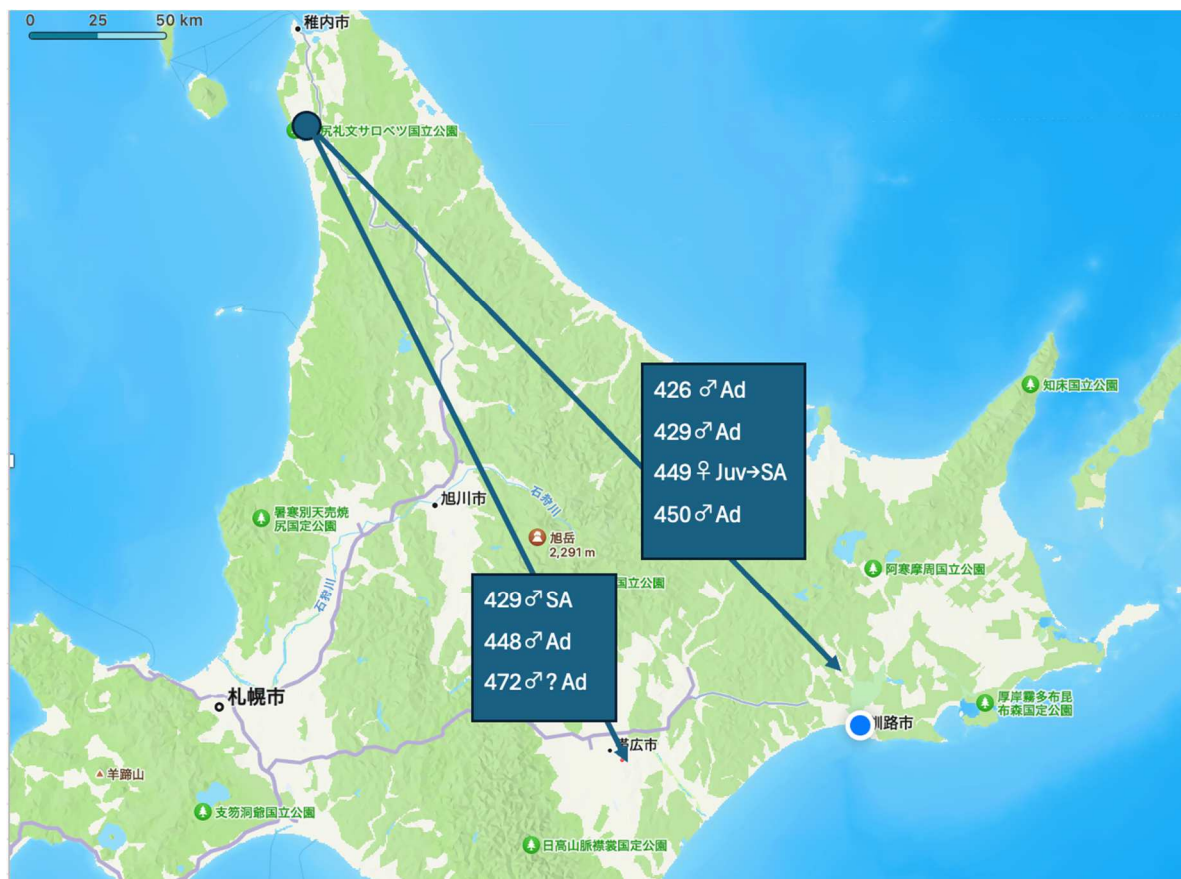
標識調査によるタンチョウの渡り个体

百瀬邦和 (NPO法人タンチョウ保護研究グループ)

本プロジェクトは、タンチョウが北海道の自然の一部として、道内の環境をどのように利用しているのか知るためのものであると理解している。3年間の試みの結果、サロベツ湿原のタンチョウは繁殖地と越冬地を往復する際に、オホーツク地方沿岸や十勝川、天塩川などの河川を中継地として餌場・ねぐらに利用している状況が明らかになってきた。またオホーツク地方の湧別で、秋の渡シーズンにはオオハクチョウやガン類の大群と一緒に、収穫後の畑で索餌するタンチョウが20羽以上も見られ、さらに同地一帯で繁殖ないし定着しているつがいは20程に増加していることから、オホーツク地方が道北に生息しているタンチョウの渡りのルートであるばかりでなく、繁殖地としても位置付けられるようになってきた。

2022-2023年はオホーツク地方で越冬したタンチョウが初めて2桁を数えた。発信機を装着した429を含む若鳥の小群が1月下旬まで興部川に滞在していたことで、中規模河川が数多くあるオホーツク地方でより多くの個体が越冬する可能性を期待される。

幼鳥で捕獲した449は1歳鳥として沿岸沿いに初山別まで南下して2週間近く滞在したこと、また429は亜成鳥だった2022-23年の越冬地が興部・浦幌だったのに、2023-24年には鶴居に変わり、興部での滞在期間が前年の半分以下に減少した。これらの例は若い個体の行動パターンが固定化していない、言い換えれば開拓者であることの実例として示され、道北で育った若い個体が新しい生息地への分散を担っていく可能性を示唆している。近年上川盆地や名寄盆地などでタンチョウの目撃情報が増えてきたので、同地方などでも発信機による移動情報をきっかけにした情報網を広げていきたい。道内各地にタンチョウのファンを増やして、タンチョウが北海道の自然環境の一部として認識され、定着していく道筋が少しずつ見えてきたように思っている。



サロベツのガンカモ類とペンケ沼活動報告

長谷部真 (NPO 法人サロベツ・エコ・ネットワーク)

北海道北部にあるサロベツ湿原周辺は国立公園とラムサール条約登録湿地、フライウェイパートナーシップ(ガンカモ類)に登録されています。サロベツ湿原周辺には大きく分けて4つ(兜沼:豊富町、泥炭採掘跡地:豊富町、ペンケ沼:豊富町・幌延町、振老沼:天塩町)のガンカモ類の主要な渡りの中継地があります。春と秋にはマガン、ヒシクイ、コハクチョウ、オオハクチョウが利用し、多い時期にはマガンが18,000羽、オオヒシクイが5,000羽確認されます。全体的には春にマガンが多く、秋にオオヒシクイが多い傾向がみられます。2015年以降は兜沼では春のマガンと秋のオオヒシクイが増加傾向に、ペンケ沼では秋のオオヒシクイが増加傾向、春のマガンが減少傾向にありました。9月から11月までの調査結果によると秋の個体数のピークは複数回あることがわかりました。

サロベツ地域の最大のガンカモ中継地であるペンケ沼にもともと流入する大きな河川はありませんでしたが、下エベコロベツ川(1926年)と福永川(1968年)が人工的に接続された結果、流入河川の流域面積が16倍になりました。こうして沼に土砂が堆積するようになった結果、およそ80年前から沼が2つに分断され、現在では沼の面積が半分以下に減少しています。このままでは将来、ペンケ沼は土砂により埋没し、ガンカモ類の中継地が失われる恐れがあります。このため私たちはバードライフインターナショナル東京(PCPD、2020年、2021年)、ほっくー基金(2022年)、パタゴニア(2023年)から支援を受け、ペンケ沼の保全に向けて様々な活動を行いました。

上流河川からの影響を調べるため、ペンケ沼の水質を調べるために春夏秋の3回採水を行い、水質分析を行いました。その結果、COD(化学的酸素要求量)、SS(浮遊物質)、全窒素、全りんなどの環境基準を達成できていない項目が多くありました。一方で、近年上流河川からの影響を受けていない北の離れ沼の水質も環境基準を満たしていない項目がありました。ペンケ沼を利用する水鳥の餌状況を調べるために、魚類調査を行いエゾトミヨやギンブナなど6科12種が確認され、外来種であるカムルチーとナマズが確認されました。

ペンケ沼には豊富町にある上流河川からゴミが流入しています。過去の調査により流入するゴミは沼の北東岸に集中していることが確認されているため、春にカヌーを用いてごみ清掃を行い、秋には地域の子供とゴミ拾いとガンカモの観察を行いました。

ペンケ沼の埋没状況を調べるために、湖面積・水深・水草調査を実施しました。ドローン飛行調査によりペンケ沼の面積(南側)は2021年には1.0km²となり、1923年(2.6km²)の38%に減少し、下エベコロベツ川河口部の先端が南岸まで120mの距離に達していました。このままでは近い将来にペンケ沼は3つに分断される恐れがあります。水深は下エベコロベツ川河口周辺では2021年の渇水期に平均16cmになりました。この低水深化により陸地化が進んでおり、2023年9月にはペンケ沼(南側)の34%がヨシなどの抽水植物に覆われていました。

ペンケ沼埋没の懸念は過去に上サロベツ自然再生協議会の議題に挙げられましたが、具体的な保全対策が実施されていません。この地域は過去の河川の氾濫を克服し、開拓によって湿原を牧草地化することで発展してきた歴史があり酪農は基幹産業です。しかし、その一方で今後はガンカモ類との共存に向けて下エベコロベツ川の流路変更・沈砂池の設置などのペンケ沼保全に向けた対策を講ずることが望まれます。